まんのう町教育委員会だより

爽風（そうふう）

子どもの健やかな成長を願って

Vol. 34

令和4年【2022】
12月1日 発行

特集 豊かな人権感覚を育てる

Contents

P.7　シリーズ「声」
P.8～9　園・学校ウォッチング　四条小学校・仲南こども園
P.10　ホッとニュース
P.11　芸術士がこども園にやってきた②

豊かな人権感覚を育む

人権とは、
誰もが生まれながらに持っている人間らしく幸せに生きていくための誰からも侵されることのない基本的な権利です。

しかし現実には、様々な偏見や差別が存在し、私たちの社会には大切な人権を侵害されている人たちがいるのです。

全ての人の人権が守られる社会にしていくために大切なことは、何でしょうか。自分や他の人の人権を守る行動ができるためには、「正しい理解」と「人権感覚」の両輪が必要であると言われています。

正しい理解

「無知は偏見を生み、偏見は差別につながる」といわれるように、偏見や差別は、相手に対する理解が不十分だったり、尊重する気持ちが足りなかったりすることにより生まれるものです。

学ぶことによって、ものごとを正しく理解することが必要です。

人権感覚

「それは変じゃない？」と、おかしさ（不合理性・不当性）に気づく感覚です。この感覚は、繰り返し言葉で説明しても身につくものではありません。

人は、自分が一人の人間として大切にされていると実感できるとき、このような感覚や意志が芽生え、育つと言われます。

女性
- 家庭や職場での男女差別
- 性犯罪等の暴力
- 夫やパートナーからの暴力
- 職場でのセクシャルハラスメント
- 妊娠・出産等を理由とする不利益な扱い

など

高齢者
- 就職差別
- 介護施設や家庭での身体的・心理的虐待
- 家族等による無断の財産処分

など

インターネット
匿名での情報発信による
- 誹謗中傷
- 名誉やプライバシーの侵害

など

障害のある人
- 就職差別
- 職場での差別待遇
- 車椅子での乗車拒否
- アパートなどへの入居拒否
- 店舗でのサービス拒否

など

外国人
- 就職上の不当な取扱い
- アパートなどへの入居拒否
- ヘイトスピーチ

など

北朝鮮当局によって拉致された被害者等
- 「拉致問題その他北朝鮮当局による人権侵害問題への対処に関する法律」施行（平成18年6月）
- 毎年12月10日～16日は、「北朝鮮人権侵害問題啓発週間」

人身取引
- 性的サービスの強要
- 労働の強要

など

参考：主な人権課題（法務省ホームページ）
みんなで進める人権・同和教育（香川県教育委員会）

私たちの周りには、こんなにもたくさんの人権課題があります。

LGBTQ+
（エル・ジー・ビー・ティー・キュー・プラス）
- 正常と思われず職場を追われる
- 好奇の目にさらされる
- 昇進が妨げられる

など

ホームレス
- 嫌がらせ
- 暴行事件

など

アイヌの人々
- 就職差別
- 結婚差別

など

犯罪被害者やその家族
- 興味本位のうわさ
- 心ない中傷
- プライバシーの侵害

など

感染症
（新型コロナウイルス感染症・エイズ・肝炎等）
- 日常生活での差別
- プライバシー侵害

など

震災等の災害
- 不確かな情報に基づいた不当な取り扱い
- 偏見や差別を助長するような情報発信

など

子ども
- いじめ
- 体罰
- 虐待
- 性的搾取（児童買春や児童ポルノ）

など

刑を終えて出所した人やその家族
- 就職差別
- 住居の確保が困難

など

部落差別（同和問題）
- インターネット上の差別的書き込み
- 結婚や交際における差別
- 就職や職場における差別
- 差別発言や差別落書き
- えせ同和行為

など

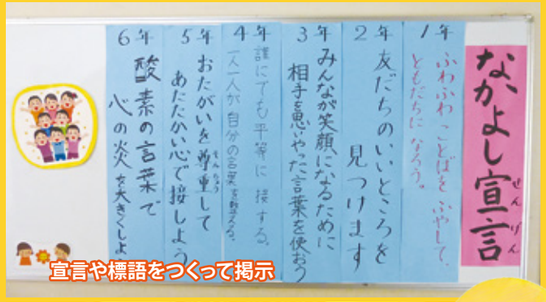
ハンセン病患者・元患者やその家族
- 施設入所政策下での厳しい偏見・差別（今も、人権と尊厳は回復していません）

※写真と本文は無関係です

さまざまな人権課題と向き合う

子どもの人権感覚を育む取り組み

人権週間



宣言や標語をつくって掲示

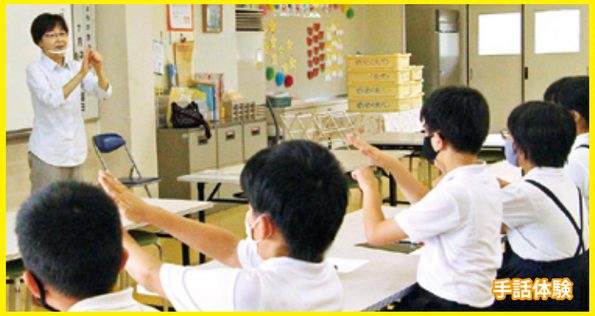
「いいところ」を伝え合う

「いじめ」について考える

人権週間には「人権集会」を開き、「人権」について考えます

心に響く読み聞かせ

体験や活動


手話体験

ボッチャ体験

車椅子バスケット体験

「ふれあいじんけんフェスタin長尾会館」でボランティアとして活動

原爆被害者の体験談

「ふれあいサロン」で高齢者と交流

視覚障害者の講演会

大島青松園訪問

関係機関との連携

人権擁護委員による人権教室

「社会を明るくする運動」と連携した校内弁論大会

教員研修

教育研究所では、毎年教員の人権・同和教育研修を実施しています

まんのう町勤務が初めての教員対象

指導者は、町担当職員

経験年数3年までの若年教員対象

町内こども園・小中学校の人権・同和教育担当職員が研修を進める

授業

思いやりについて考える

著作権について知る

平和について考える

ICTの使い方を考える

さて、みなさん。
「初老の紳士」と聞いて、
何歳ぐらいの男性を思い浮かべますか？

人権週間に寄せて（12月4日～10日）

「初老」は、長らく「40歳の異称（広辞苑）」と定義されてきました。しかし寿命が延びた現代、この定義には違和感があります。40歳代の、働き盛りの人を「初老」とは呼ばないでしょう。そこで、2010年代には、「おもに60代」と定義する辞書も見られるようになりました。

ことばは生きています。目まぐるしく変わる社会や価値観とともに、ことばの中には、その意味が変化してきたものがあります。一方で、新しいことばも生まれ続けてきました。そのようなことばたちを集約して1冊にまとめたのが「辞書」です。辞書は、ことばを通してその時代をうつす「かがみ」だともいえましょう。

それでは、最近、話題に取り上げられることの多い「ジェンダー※1」の視点から、「女」という言葉のとらえ方の変遷を見てみましょう。（『三省堂国語辞典』参照）

※1　ジェンダーとは、生物学的な性別（セックス）に対して、社会的・文化的につくられる性別のこと。服装や髪形、言葉遣い、職業選択、家庭や職場での役割や責任の分担などについての、「男性らしさ」「女はこうあるべき」といった通念。

おんな「女」

初　版（1960年）：人のうちで、**優しくて、子どもを産み、育てる人。**

第二版（1974年）：人間の生まれつきのはたらきとして、子どもを生む力を持つ（ようになりうる）人。
気持ちがやさしい、弱い、受け身である、などのように、女が本来持つと考えられる性質を特に強く持った人。

第五版（2001年）：人間のうち、子を生むための器官と生理を持つもの。
気持ちがやさしい、弱い、受け身である、などのように、女らしいとされる性質を特に強く持った人。

第七版（2014年）：人間のうち、子を生むための器官を持って生まれた人（の性別）。
〔法律にもとづいて、この性別に変えた人もふくむ〕

第八版（2022年）：人間のうち、子を生むための器官を持って生まれた人（の性別）。
〔生まれたときの身体的特徴と関係なく、自分はこの性別だと感じている人もふくむ〕

（※第二版～第八版は抜粋）

なるほど！それじゃあ「男」のとらえ方は、どんなふうに変化したんだろう。気になるなあ。

「やさしい」「弱い」「受け身である」――これらは、その時代の女性のイメージであり、「そうあってほしい」「そうあるべき」といった見方が反映されたものだといえます。

また、女性は、生物学的にはそのほとんどが「子を生むための器官を持って生まれ」ますが、だからと言って、すべての女性が「子どもを産み、育てる」わけではありません。

第七版、第八版には、トランスジェンダー※2に対する配慮も見られますね。

※2　トランスジェンダーとは、「身体の性」が男性でも「心の性」は女性というように、「身体の性」と「心の性」が一致しないため「身体の性」に違和感を持つ人のこと。

おとこ「男」

初　版（1960年）：人のうちで、**力が強く、主として外で働く人。**

第八版（2022年）：人間のうち、子種をつくるための器官を持って生まれた人（の性別）。
（※抜粋）　〔生まれたときの身体的特徴と関係なく、自分はこの性別だと感じている人もふくむ〕

〔参考：NHK首都圏ナビWebリポート『ことばから時代を考える』2022.1.2〕

消えていくことば、生まれることば、意味が変化することば…そこには必ず背景となる時代の価値観や人々の思いがあります。人権尊重の視点からも、私たちはことばに敏感になり、適切にことばを選ぶことができるよう努力しなければなりません。そして、自分の使おうとしていることばがどう伝わるかを、常に相手の立場に立って考えてみることが大切です。

シリーズ『声』

第20回　芸術士さんとのすてきな出会い

ルカさん、ミズカさん、むーさん。今年度、町内こども園を訪れたのは、この3人の芸術士さん。彼らが展開する個性的かつ創造的な活動は、子どもたちを夢中にさせ、輝かせました。その絶妙な子どもへの接し方や活動の組み立て方に、先生方も刺激を受けたようです。そんな先生方の声を聞きました。

自由に表現するって楽しい！

芸術士さんが来てくださり、子どもたちと一緒に色水遊び・家作り・身体表現の活動を体験しました。

初回は、ミズカさんと色水遊びをしました。赤・青・黄の色水やたくさんのカップ、スポイトなどを用意してくださり、「みーちゃんって呼んでね。自由に色を組み合わせて実験を楽しんでね」と、子どもたちに親しみやすく話をしてくれました。

色水遊びの経験がある5歳児の子どもたちは、スポイトの使い方に慣れると、だんだんと真剣な表情になっていきました。カップに入れた色水に別の色水を1滴ずつ加えて、色が変化していく様子をじっと見つめては、また足して微妙な色の違いを表現しています。その姿は、はじめにみーちゃんが言ったように、まるで〝色の実験〟をしているようでした。

「これは薄いけど、こっちは濃いやろ？ちょっとずつ違うんで！」と、誇らしそうに話しながら机いっぱいに並べた色水は、似ているようでも同じ色はひとつもありませんでした。

遊びに新たな気付きが生まれた瞬間、子どもたちがどんどん夢中になっていく姿を肌で感じることができて、とても貴重な経験になりました。

また、ルカさんの家作りでは、作り方を自ら考えてみんなで力を合わせて建てました。むーさんの身体表現では、様々な音やリズム、言葉からイメージを膨らませて、体全体で自由に表現することを楽しみました。

芸術士さんが、「飽きさせない」「表現の全てが正解」と話されていたように、かける言葉や用意された環境には、一つ一つにたくさんの工夫や思いが込められていて、あっという間の楽しい時間でした。これからも日々の遊びの中で、子どもたち一人一人の豊かな感性に触れて、一緒に心を動かしながら自由に表現する楽しさを感じていきたいと思います。

琴南こども園　保育教諭　宮川　愛美

あたたかく柔軟な視点と心に触れて

子どもたちは、芸術士さんの活動を楽しみにしていました。

ルカさんはブラックライトの光を使った身体遊び、むーさんは楽器を使ってのリズム遊びをしてくれました。明るく元気な芸術士さんの雰囲気に、緊張気味だった子も表情が和らぎ、自分なりの表現方法で楽しむ姿が見られました。

ルカさんとの身体遊びでは、暗闇の中、蛍光色に浮かび上がったリボンを見て歓声が上がりました。テープに当たらないよう体の向きや動かし方を工夫しながらくぐり抜けます。子どもたちは頭から指先まで意識したり、胸の高まりや緊張する気持ちを感じたりして、自分の心と体に向き合える時間となりました。

そんな中、ルカさんが子どもたちにかける言葉が印象的でした。場面とぴったり合うリズミカルな言葉には、心がほっこりするようなあたたかさと笑顔になれるユーモアがあり、子どもたちの遊びへと向かう気持ちを高めてくれるようでした。

一方、むーさんのリズム遊び。用意してくださった楽器は、手作りのもの、外国のものなど、初めて触れるものばかりでした。何だろうと音を鳴らしてみる、次に音の違いを知る、そして友達とリズムにのって楽しむ――そんなふうに活動はつながっていきました。

むーさんは遊びの過程や子どもの姿に合わせてさりげなく様々な楽器を奏でます。その楽しい音色は、子どもたちを次のステップへそっと後押しするかのような優しさでした。

私は、芸術士さんたちの姿から、おおらかに子どもたちを受け止める心と一緒に楽しむことの大切さを学び、遊びを深めるきっかけを自分なりの方法で柔軟に考えていきたいと思いました。

また、これらの活動の中で、子どもの新たな一面に出会うこともできました。子どもの様々な姿や成長を見守ることのできる喜びを改めて感じ、子どもたちと過ごす日々を大切にしていきたいと思いました。

四条こども園　保育教諭　香西　有香

園・学校ウオッチング

四条小学校では、人や自然、社会と出合ったり、なかまと共にチャレンジしたりする場をつくり出すため、四条タイム（総合的な学習の時間）の再編に取り組んでいます。

自然生態園での里山観察・体験活動

4年生は年間7回、国営讃岐まんのう公園にある自然生態園を訪れ、ガイドウォークや季節に応じた体験活動を行っています。

ガイドウォークでは、ボランティアの説明を聞きながら里山観察をしています。「これは何という虫だろう」と、日頃見たことのない甲虫に目を輝かせて尋ねる子ども、「あれ？夏に飛んでいたトンボとは色や姿が全然違うぞ」と、新たな気づきに驚きを感じる子ども…。自然の中でほんものにふれる喜びにひたる姿が随所に見られます。

年間を通して同じ里山を観察することで、子どもたちは、生き物が生き残るために季節に応じて変化する様子（落葉、冬芽、冬眠等）に気づきます。その理由を調べたり話し合ったりすることで、命あるもののたくましさや自然の巧みさを感じ取っていきます。また、動物が植物を食べ、その排泄物が植物の栄養になるというように、生き物が命を通したサイクルの中で互いに支え合って生きていることにも気づいていきます。

体験活動では、稲の脱穀やしめ縄づくりを行っています。昔の道具や暮らしに込められた先人の知恵を、体験を通して感じ取っています。

命の不思議に触れて

昔の道具を使ったよ

人や自然、社会と出合い なかまと チャレンジする

四条小学校

素敵なランタンができました

栽培から販売、そしてみんなのことを考える活動へ

昨年度末から地域の方や町教育委員会の支援を得て、排水溝の設置や土壌改良を進め、学級園を整備しました。

6年生はこの学級園を利用し、春から秋にかけてミニカボチャを栽培しました。四条公民館長からいただいた葦を敷き詰め、草抜きや水やりに励んだ結果、約40個の実を収穫することができました。

子どもたちはこの実を使ってジャック・オー・ランタンをつくり、ハロウィンの際に販売する計画です。また、この他にも、エコバックを作ったりパンジーを育てたりして、11月の四条っ子フェスタで販売する予定です。

子どもたちは、自分たちがつくったものを売ることを通して、人の役に立つ喜びを実感することでしょう。同時に、買う側の立場に立って安全性や耐久性を確認したり、商品として販売することの意味を話し合ったりすることで、社会に対する責任を6年生なりに感じていくことと思います。

こうして得た収益は、子どもたちが、卒業していく小学校や在校生のためになる使い道を考え、決めていく予定です。他者のことを思う心が一層育っていくことを願っています。

アルミ缶回収や募金から みんなのことを考える活動へ

5年生は年間を通して、アルミ缶回収を行っています。4年生の社会科で学習したリサイクルの意味や環境を守る大切さを、体験を通して学んでいきます。

年度始めに子どもたちは、活動の目的や回収方法を全校生や保護者にお知らせしました。保護者の協力もあり、毎週金曜日の朝は、缶入りの袋を抱えた子どもが何人も登校してきます。児童玄関で待ち受ける5年生は、やりがいを感じてとても嬉しそうです。

本年度も9月末現在で約3千5百個を集めることができました。

回収で得た収益で、昨年度は全校生が自由に使えるサッカーボールを購入しました。本年度も子どもたちが相談し、みんなのことを考えた取り組みが進んでいくことでしょう。

また、5年生は毎年11月になると、学校の中心となって赤い羽根共同募金を行っています。これも一人ひとりの小さな力が合わさり、みんな（社会全体）を支えていく活動です。呼びかけを行う5年生はもちろんのこと、それを聞き、参加することで他学年の子どもたちも、その意味を学んでいきます。

アルミ缶回収（児童玄関前）

ダイナミックな活動の展開と、活動を通して学んだことを味わい、共有することを大切にして、子どもたちに未来に向けて生きる力を培っていきたいと考えています。

子どもも大人も わくわくするような園に

仲南こども園

仲南こども園の玄関を入ると、四季折々の花々が毎日子どもたちを迎えてくれます。この園庭へと続く「花の小径」は、家庭と園をつなぐ空間にもなっていて、親子で花の名前を言ったり、ここに集まる虫に思わず足を止めたり、今日の遊びを楽しみに走りながら登園したりする子もいます。

夏の終わりには、「コキアのトトロ」が登場し、子どもたちだけでなく、保護者の心も和ませてくれました。

コキアのトトロ

自然豊かな園庭で「心も体もたくましい子ども」に

昨年、園庭の一角に作った「にこにこ農園」では、子どもたちが用務員さんとスナップエンドウやオクラ、とうもろこし等の様々な野菜を育てており、いい学びの場となっています。

先日、大根のタネをまきました。タネを手にした子どもたちは、「ちっちゃい」「丸い」「大根の匂いがする」などと、思い思いに話をしながら植えました。大きな大根ができたら調理員さんにおでんにしてもらうのを、今から楽しみにしています。

このような自然豊かな園庭で毎日先生や友達と様々なことを経験しながら、「心も体もたくましい子ども」に育ってほしいと願っています。

とうもろこしをカラスから守る

私たちが作ったよ

妖怪さがしに夢中になって

春に5歳児クラスで始まった「妖怪のしわざさがし」。築山のトンネルに小さなキズを見つけて「これ鬼の爪の跡や」とか、運動場の土のくぼみに「この足跡は妖怪のしわざかな」等と、妖怪図鑑を手に園庭中を歩きまわります。見つけた妖怪？の写真をテラスの大きな掲示版に貼っておくといろいろなクラスの子どもたちがやってきて、「おもしろそう」と、どんどん他のクラスに広がっていきました。

また、満濃池の龍に興味をもった子どもたちは、地域の「満濃池博士」の話に心を弾ませ、「ぜったいいる」と、満濃池まで「龍探しの大冒険」に出かけました。そして、秋には、それまでの経験や絵本『ようかいむらのどんどこまつり』を読んだこと、地域でもお祭りの夜習いが始まったこと等が重なり、「妖怪まんじゅう」「えんま大王じごくの焼きそば」など、アイディアいっぱいのお店屋さんや獅子作りが始まり、「妖怪祭り」へとつながっていきました。

満濃池博士のお話

妖怪のしわざさがし

アマビエのたこ焼き屋さん

保護者も一緒に楽しむ

降園時に園であったことを生き生きと保護者に話し始める子どもたち。その日の遊びを掲示した写真を見ながら、保護者も「なるほど、そういうこと」と、子どもたちの話に耳を傾けます。

そのうち、妖怪ブームは保護者にも広がり、遊びに使う空箱や包装紙、「妖怪新聞」などを一緒に用意してくださり、朝の登園時に「これいいな。絶対使える」等と、保護者同士の会話も生まれていきました。

「妖怪新聞」に夢中です

ファンタジーの世界に心躍らせて

「妖怪」という目に見えないファンタジーの世界だからこそ、子どもたちはどんどんいろいろなモノを注意深く見るようになり、「本当にいるのかな」と、想像力を働かせて探したりつくったりしていきます。そして、園での遊びの過程を家庭へと発信することで楽しさを共有し、家庭での話題へとつながっていきました。

妖怪を通してさまざまなことを経験してきた子どもたち。今は、妖怪カルタに夢中になっています。

子育て支援は、こども園の重要な役割といわれています。仲南こども園では、教育・保育を通して、子どもだけでなく保護者や地域も一緒になって「こども園が楽しい」「子育てって楽しい」と思えるような園にしていきたいと思います。

仲多度郡・善通寺市 小学生陸上記録会

10月12日：Pikaraスタジアム

「仲多度郡・善通寺市小学生陸上記録会」が開催されました。今年も、感染予防のため、開会式、閉会式は行われず、大会関係者以外の入場も禁止となりました。

無観客の静かな競技場の中では熱い戦いが繰り広げられ、全力を出し切った子どもたちの輝く笑顔が見られました。

成績優秀者は、11月3日、6日に開催された香川県小学生選抜陸上競技大会に出場しました。

入賞者【第3位まで：①②③は順位を表す】

80mハードル

5女 ③ 藤澤　咲奏（満濃南）　16″96

100m

5女 ② 白川　美槻（仲南）　16″25
6女 ② 冨井　夏鈴（長炭）　15″37
6男 ① 中西　一真（仲南）　13″68

4×100mリレー

5女 ② 仲南　1′03″84
（宮下日向子・北山紗千花・香川心海・白川美槻）
6男 ② 仲南　57″05
（高橋瑛史・中西一真・桃田琥羽・横関奏亮）

走幅跳

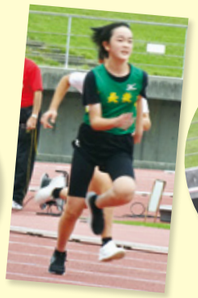
6女 ③ 請川　陽葵（高篠）　349cm

走高跳

5女 ① 古林　咲　（四条）　120cm
6女 ① 細木原愛音（仲南）　121cm
② 鈴木陽茉莉（仲南）　118cm
③ 小西　佑奈（高篠）　118cm
※試技数（跳んだ数）の差による
6男 ① 中浦　小虎（四条）　129cm

ジャベリックボール投

5女 ② 坂本　星姫（高篠）　32.34m
5男 ② 高木　大河（四条）　37.67m
6女 ① 久保田志羽（満濃南）　37.27m
6男 ① 宮脇　迅斗（長炭）　49.75m 大会新
② 亀田　快都（四条）　48.49m



心をつないだ秋

9月23日
満濃中学校で奏風祭が無観客で開催されました

ランチルーム、中庭、プールなどに分かれて、感染症予防をしながら、練習に取り組みました。

当日は、どの学級も全員の心がつながり、すばらしい合唱となりました。

芸術士がこども園にやってきた ②

まんのう町では、今年度、町内のこども園に高松市にあるNPO法人アーキペラゴから3名の芸術士が派遣され、子どもたちの**感性や探求心、想像力、創造力などを伸ばす**取り組みを行っています。

前回（第32号）で紹介できなかった2名の芸術士の活動について紹介します。

芸術士　アートに通じた人です。**子どもたちの感性と想像力を引き出す手助け**をすることが役割です。

ミズカさん（みーちゃん）
香川県出身　専門は絵本・イラストレーション・造形

『色水遊び』　6月2日 … 琴南こども園

きれいな色ができたよ

いろいろな色の絵の具を使って、お気に入りの色水を作りました。できた色水を透明なビニール袋に入れて、素敵な飾りができました。

『お絵描き』　6月 7日 … 高篠こども園　10月20日 … 満濃南こども園

ミズカさんにもぬっちゃった

アクリル絵の具を混ぜて、お気に入りの色を作りました。キャンバスは、遊具に貼ったビニールシートでしたが、時間がたつと自分の手や服、先生やミズカさんもキャンバスになりました。

村井知之さん（むーさん）
香川県出身　専門はパフォーマンス

『リズムに乗って』　9月20日 … 仲南こども園

むーさんのまね、楽しい！

風に翻る旗をつないで輪にしたむーさん。子どもたちは、その中に入り、軽快な音楽に合わせて体を動かしたり、むーさんの動きをまねしたりしました。そのうち、むーさんの持っていたペットボトルをバトン代わりにリレーが始まりました。

『太鼓の達人たち』　9月29日 … 四条こども園

トン・トン・ト・ト・トーン

いろいろな種類の打楽器。子どもたちは楽器を手に、思い思いにリズムを刻みます。むーさんとセッションを楽しむ子たちもいました。

まんのう町教育委員会だより　爽風　Vol.34
令和4年【2022】12月1日発行

編集後記

「『明るく元気に』病」という文章を見つけました。著者は心理学者の河合隼雄さん※。実は「明るく元気に」は、私自身がずっと引っかかりを感じてきた言葉でした。河合さんが紹介していたのは、仲間うちの飲み会で聞いた、ある人の幼稚園時代の思い出話です。

その男の子をSちゃんとしましょう。Sちゃんは、ある日大切な発見をしました。隣の教室で、ある女の子が読んでいる絵本が素晴らしいのです。どうもシンデレラのお話のようでした。何とかして自分も読みたいと思いましたが、隣の教室に入っていってそれを読む勇気はありません。おとなしい子でしたから。

諦めずに機会を窺っていたある日。その日は、台風がきたとかで登園する子が少なく、隣の教室にも少ししか園児がいませんでした。「今だ！」と思ったSちゃん。教室に入り、念願の絵本を手に取り、読み始めました。どんなにか嬉しかったことでしょう。

ところが、先生の大きい声が聞こえてきたのです。

「みんな、せっかく来たのだから、明るく元気に一緒に遊びましょう」

でも、Sちゃんは絵本にかじりついています。

「Sちゃん、そんな怖い顔してひとりで絵本など見てないで、みんなと一緒に明るく元気に遊びましょう」

Sちゃんは、「この本を読みたい」とは言えませんでした。絵本に心を残しながらも先生に手を引かれていき、みんなと一緒に歌を歌ったりしたそうです。

河合さんは言います。どうして先生も親も、子どもはいつも「明るく元気に」していなくてはならない、と思うのだろう。大人の「明るく元気に」病のおかげで、悲しい目や苦しい目にあった子どもは多いのではなかろうか、と。昔のこととして笑いながら聞いたが、悲しい話であったと、河合さんは振り返っています。

「明るく」「元気に」――この言葉は、こども園や学校の目標としても好まれ、よく使われます。しかし、子どもの中には、そう求められることをしんどいと感じる子もいるのではないだろうか、子どもだってみんな、その子なりの荷物を背負って懸命に生きているのだから…。ずっとそんな思いがぬぐえず、引っかかりを感じてきた私は、この文章に出会って、一気に胸のつかえが下りたように感じました。

「子どもは明るく元気なもの」主語を変えてみると、どうでしょう。「女性は」「高齢者は」「障害者は」…。「○○は▽▽なもの」といった思い込みや決めつけから解き放たれることで、私たちはさらに豊かな多様性を手に入れることができるように思います。『大切なものはみんな違う　大切にされて嬉しいのはみんな同じ』（2021年度愛知県人権啓発ポスターより）。

今年も、12月4日～10日は人権週間です。

（Y. T）

※『ココロの止まり木』：朝日新聞社2004.5.30

表紙絵：綾井 瑞希（満濃中学校美術部2年）

次号予告（2月1日発行）

特　集　園・学校ウォッチング

学校行事の新しい形
琴南小学校・琴南こども園

発行責任者：まんのう町教育委員会　〒769-0313　香川県仲多度郡まんのう町生間415番地1
TEL（0877）89－7100　FAX（0877）89－8100